

お母さんは二人分

みずたに 水谷 友亮 ゆうすけ

ぼくのお父さんは、ぼくが四才の時、病気でなくなりまして。その時から、お母さんは、お父さんと二人分になりました。

お母さんはかんごしです。お父さんがなくなつてから、生活していくために、かんご学校へ行つてしかくを取りました。かんご学校は、勉強や実習でとてもいそがしくて、ぼくは時々、ぼあちゃんの家にとまっています。今でもおほえているのは、夜、お母さんが帰つてしまう時、けん関でぼくが泣いて通せんぼしたり、車に乗りこんで、お母さんをこまらせた事です。今なら、お父さんの分をお母さんが働くために、学校で一生けん命がんばつていた事や、お母さんもつらかつた事がわかりますが、その時のぼくは、ただただお母さんといっしょにいたくて、いっしょにねむりたくて、わがままを言いました。連れて帰つてくれて、ぼくがねるまでいっしょに遊んでくれて、夜中に勉強していたお母さん。やさしくて強いと思います。

かんごしになつてからは、帰りもおそくて、休みもいなくて、ぼくはいつもぼあちゃんの家でした。さみしくて悲しくて、ぼくの心の中で、（ママなんかいなくなればいい。）という声が聞こえるようになりました。お母さんに話したら、「ママが死んでもええの。」と悲しそうな顔になりました。「死んだらいいや、でも聞こえるんやもん。」と泣きながら言いました。そのあと、

お母さんは働く病院を変えました。今は、五時半に帰つてくるし、日曜も休みがあります。夜さんの時は、ぼあちゃんの家にとまるけど、ぼくの心の中の変な声は消えました。また、ぼくは、わがままを言ったのかもしれない。でも、お母さんは、すぐ病院を変えて、ぼくを守つてくれたのだと思います。

お父さんは、おこるとこわい人だったそうです。そして最近、お母さんは、おこるとめちやくちやくわいです。たぶん、世界で一番。ぼくは、ぜつたい泣きます。でも、お母さんの声はお父さんの声。お父さんがいたら、きつとこうやつて、しかられた。そして、そのあと、お母さんがぎゅつとしてくれる。お母さんの中にお父さんがいます。

お父さんがよく言っていた言葉は、「すんだ事にすんな。次どうするかや。」です。ぼくは、この言葉が大好きで、これでお母さんをはげまします。お母さんの言葉は、「やればできる。」「ピンチはチャンス。」「明日はきつといい日になる。」です。この言葉のおかげで、ぼくは、何度も元気が出ました。

お母さんはお父さんと二人分。体重もきつと二人分。おこる時も、笑う時も、ぎゅつとしてくれる時も二人分。今、ぼくはさみしくありません。三人いっしょだからです。お父さん、そばで見えていてね。お母さん、いつもありがとう。大好きです。